

ユーモアとウィットの

吉田兼好・『徒然草』

石川 恵悟

- 一、人間とはこうも変えられるものか(ワーク①)
- 二、基本事項
 - ① 教養人 吉田兼好
 - ② 『徒然草』の概要
 - ③ 『枕草子』を意識？
- 三、強烈なリアリズム(ワーク②)
- 四、和歌の技巧(ワーク③)
- 五、シンプルにして奥深い

「参考文献」



一、人間とはこうも変えられるものか

A

1 「萬よろずにいみじくとも、色好まざらん男をのこは、いとさうごうしく、

玉たまの卮さかづきの底なき心地ぞすべき。」(第三段)

※いみじ 〓 すぐれている

さうごうし 〓 物足りない

2 「世の人の心を惑はすこと、色欲には如かず。人の心は愚かなる

ものかな。…… 久米の仙人の、物洗ふ女の脛はぎの白きを見て、

通つうを失ひけんは、まことに手足・膚はだへなどのきよらに、肥あぶらえ膏

づきたらんは、外ほかの色ならねば、さもあらんかし。」(第八段)

※通 〓 神通力

3 「六塵ろくちんの樂欲ごうよく多しといへども、皆厭離えんりしつべし。その中に、たゞ

かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、変はる所なしとぞ見ゆる。」(第九段)

※六塵 〓 人心における六つの穢れ(色・声・香・味・触・法)

惑ひ 〓 色欲

B

- 1 「女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚だしく、物の理を知らず、たゞ迷ひの方に心も早く移り、詞も巧みに、苦しからぬ事をも問ふ時は言はず。用意あるかと思れば、また、あさましき事まで、問はずがたりに言ひ出す。深くたばかり飾れる事は、男の智慧にも優りたるかと思へば、その事、あとより顯はるゝを知らず。質朴ならずして、拙きものは女なり。その心に随ひてよく思はれんことは、心憂かるべし。」(第百七段)
- ※人我 〓 我を主として固執するさま (仏教語)
- 苦しからず 〓 さしつかえない
- あさまし 〓 あきれはてる

- 2 「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。……異なることなき女を、よしと思ひ定めてこそ、添ひ居たらめと、賤しくもおし測られ、よき女ならば、らうたくして、あが佛と守りあたらめ。たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。……いかなる女なりとも、明暮そひ見むには、いと心づきなく憎かりなむ。」(第百九十段)

※異なることなし 〓 たいしたことない

らうたし 〓 何かと世話をしていたわってやりたい

心づきなし 〓 気に食わない

二、基本事項

① 教養人 吉田兼好

・本名は卜部兼好、出家してからは兼好法師
うらべかねよし
けんこう

西暦	兼好	社会情勢
一一八一		弘安の役
一一八三	※卜部家に生まれる	
一二九七		永仁の徳政令
一三〇一	蔵人として宮仕えを始める	
一三〇八	宮廷を辞す	
一三一三	※出家（各地を回り始める）	
一三三〇	※『徒然草』を執筆	
一三三三		鎌倉幕府滅びる
一三三四		後醍醐天皇、建武の新政
一三三六		南北朝時代へ
一三五二	※没す	

「命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬほどにて死な
はち
よそぢ
んこそ、目安かるべけれ。」（第七段）

② 『徒然草』の概要

『徒然草』で扱われているテーマ

テーマ	段の数	割合
処世訓	八五段	三三%
広義の学問資料提供	六七段	二五%
趣味情操の涵養資料	二七段	一〇%
女性・結婚・色欲についての説	一〇段	四%
社会・人事現象の考察	九段	四%
無常の強調と出家又は閑居の勧説	二二段	八%
滑稽の興味を主とした段	一六段	六%
奇聞逸話	一四段	五%
その他	一六段	六%

橘純一『日本古典全書 徒然草』P36～39より作成

三大随筆

① 『枕草子』（清少納言 平安中期）

・宮廷生活の体験など、「をかし」の文学。

② 『方丈記』（鴨長明 鎌倉初期）

・無常観を主題、漢語や仏教語が多い。

③ 『徒然草』（吉田兼好 鎌倉後期）

・無常観を含め、多くの思想が混在、表現技巧多し。

③『枕草子』を意識？

1 「法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人には木の端はしの

やうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさること

ぞかし。」（**第一段**）

2 「賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き、硯に筆の

多き、持佛堂じぶつどうに佛の多き、前栽せんざいに石・草木の多き、家のう

ちに子孫こうまごの多き、人にあひて詞の多き、願文がんもんに作善させん多く書

き載せたる。

多くて見苦しからぬは、文車ふみぐるまの文ふみ、塵塚ちりづかの塵ちり。」（**第**

七十二段）

※調度 Ⅱ 日常使用する小道具類

持佛堂 Ⅱ 常に身近に持つ仏像を安置する御堂

願文 Ⅱ 神仏に願をかける時に奉る文書

作善 Ⅱ 善事をする事

文車 Ⅱ 室内で用いる、書物を運ぶための小さい車

三、強烈なりアリズム

「友とするに悪き者、七つあり。一つには、高くやんごとなき人、二つには、若き人。三つには、病なく身つよき人。四つには、酒を好む人。五つには、武く勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、慾ふかき人。

善き友三つあり。一つには、ものくる、友。二つには、醫師。

三つには、智恵ある友。」(第百十七段)



四、和歌の技巧

1 「延政門院 幼くおはしましける時、院へ参る人に、御言づ
てとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじ直ぐなもじゆがみもじとぞ 君
はおぼゆる

〇〇〇〇思ひ参らせ給ふとなり。」(第六十二段)

2 頓阿『続草庵集』より

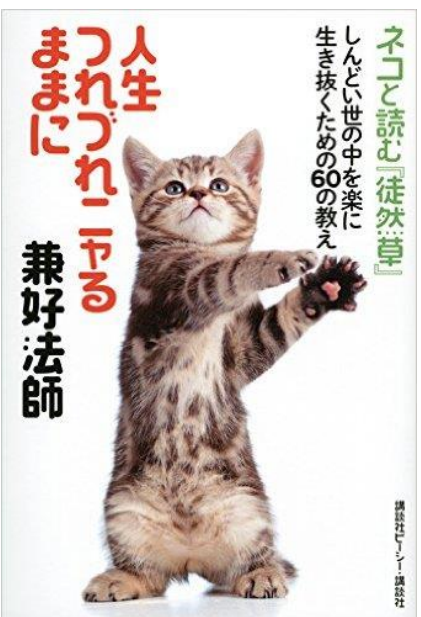
兼好 ↓ 頓阿

「夜も涼し 寝覚の仮庵 手枕も 真袖も秋に 隔てなき風」

頓阿 ↓ 兼好

「夜も憂し ねたくわが背子 はては来ず なほざりにだに」

しばし問ひませ」



五、シンプルにして奥深い

「その物につきて、その物を費し損ふもの、數を知らずあり。

身に虱あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子

に仁義あり。僧に法あり。」 (第九十七段)

「参考文献」

- 秋末一郎『文法詳解 徒然草精釈』（加藤中道館）1963
- 石黒吉次郎他編『徒然草発掘』（叢文社）1991
- 上田三四二『徒然草を読む』（講談社学術文庫）2005
- 江部鴨村『徒然草全講義』（風侍書房）1997
- 大野芳『吉田兼好とは誰だったのか』（幻冬舎新書）2013
- 川平敏文『兼好法師の虚像 偽伝の近世史』（平凡社）2006
- 桑原博史『日本の作家24 人生の達人 兼好法師』（新典社）1983
- 小松英雄『徒然草抜書 解釈の原点』（三省堂）1983
- 島内裕子『徒然草の変貌』（ぺりかん社）1992
- 橘純一『徒然草』（朝日新聞社）1947
- 富倉徳次郎『卜部兼好』（吉川弘文館）1964
- 永井路子『わたしの古典13 永井路子の方丈記・徒然草』（集英社）1987
- 橋本治『絵本徒然草』（河出書房新社）1990
- 橋本武『解説 徒然草』（ちくま学芸文庫）2014
- ひろさちや編訳『【新訳】徒然草』（PHP研究所）2012
- 三木紀人『徒然草（一）～（四）』（講談社学術文庫）1979～1982
- 三谷栄一編『徒然草事典』（有精堂）1977
- 『新訂国語総覧 第二版』（京都書房）2001
- 『新編日本文学史』（第一学習社）2005
- 『図説 日本の古典10 方丈記・徒然草』（集英社）1988
- 『増補 国語国文学研究史大成の枕草子 徒然草』（三省堂）1977
- 『日本古典文学全集27 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』（小学館）